

特 54

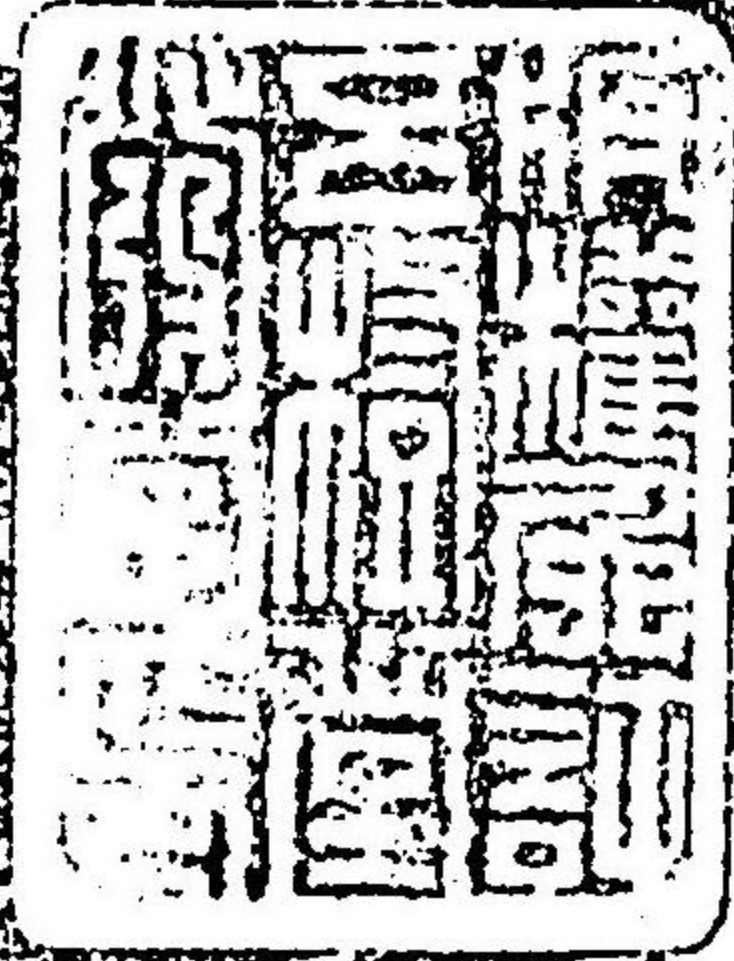
54 小潮花口演

柳葉亭繁彦著

稻野年恆畫

蓮華生鮮畫

第三號



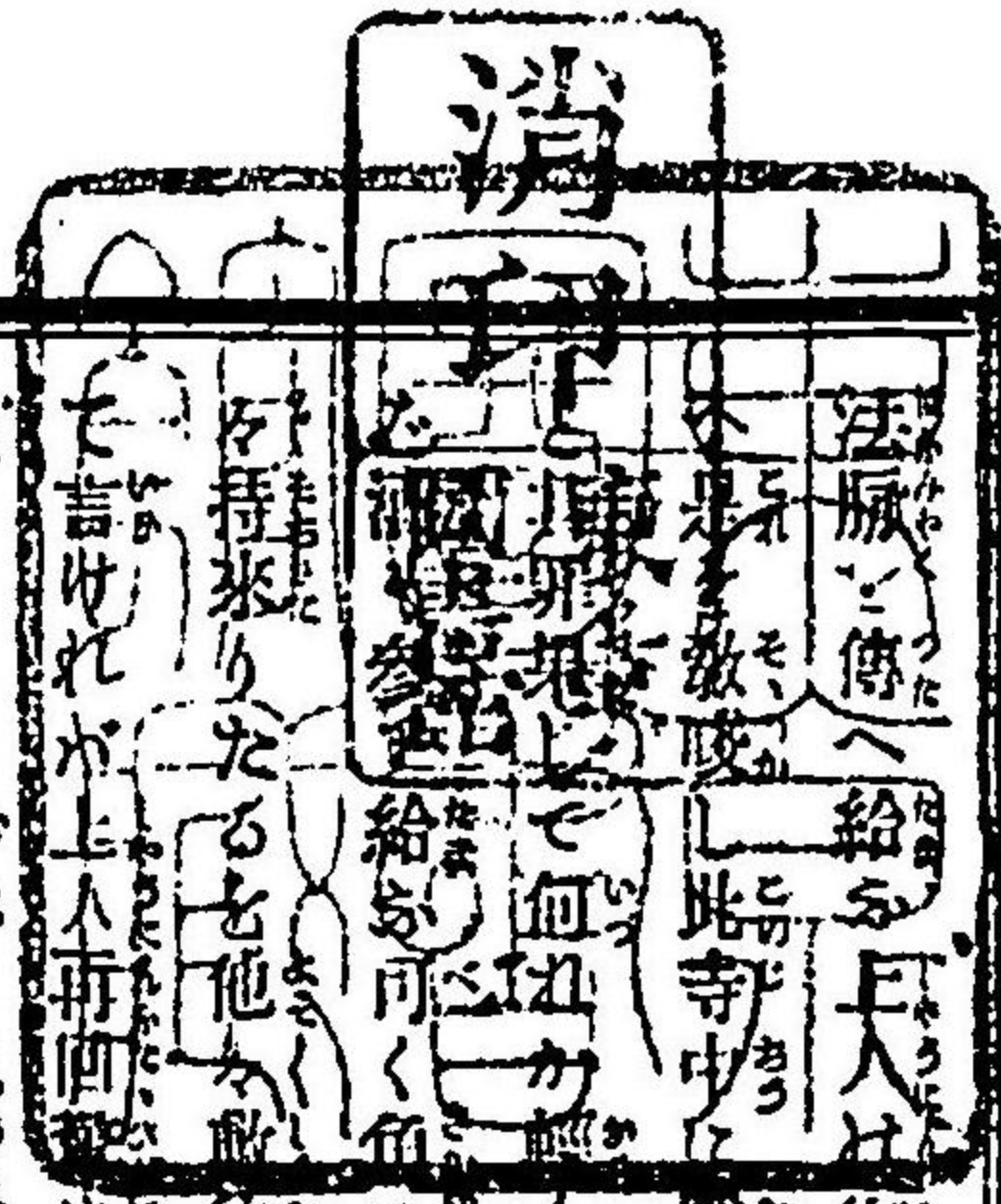
稟告

此物語は天明の年間下總國葛飾郡關宿の藩士小泉半之丞と安達辨之助の兩人が一婦人の爲に遠恨を含み藩邸の馬廐所に於て武藝の試合を爲すに始り半之丞竟に辨之助を討て君侯の氣色を蒙り割腹の命下る時偶々養傳寺の日功和尚參邸して之を救ひ關宿へ伴ひたるのち愛に溺れて郷左衛門お花を引具し養傳寺に詣る歸路水懸峠にて烏山の悪僧天海に殺されお花を奪はれたる件より半之丞の養道飯高より修行中花買お婆お丑の養女お菊と好通したる末お丑の一子多九郎關宿の養傳寺を脅迫し金を得んとして却て老僧に説教され更に養道と義を結び朝師が謎彫の靈像を盗み中山の行者と披露し上總國一の宮に於て遊華往生を企て多くの人を欺きしも俠客法華丈助の活眼に見顯され捕縛となる有名の談柄にして吾耕師伊東潮花氏の口演なるを柳葉亭先生懇ろに筆記せられ通計拾回限り讀切と成る最面白き稗史なれば御評判御購讀を願ひ上候也

明治十八年八月八日板權免既
明治十九年一月 日發 免
定價六錢五厘
通計十回讀切

編輯人 東京府士族 中村邦太郎
京橋區船屋町十三番地
出版人 東京府平民 森川林三郎
同區南箱町七番地
大 東京日本橋區新芳町十二番地 良明堂
賣 同馬喰町三丁目 自由堂
捌 同 彌亮町壹丁目三番地 信文堂
所 横濱太田町二丁目 萬字屋
相州横須賀沙上町 鈴木屋

明治十九年二月十日 日內務省贈付



法脈傳へ給ふ上人は御弟子の中に人の娘に逢通りて利不果を教へし此寺中へ隠匿を知りて知らざる打過給ふを待來りたるを他へ教へ給ふと心得難しと落付拂つた言付けが上人前向きて開け何をか云ふ我寺に申すも畏みければ無垢に精舎にして宗祖上人の法脈代々に傳へて十八世貧道愚か成共此寺に主固にして藩主の御菩提所なるに俗人ども厭可き淫猥なる所業を爲す者有べき畢竟汝野狐の爲に慙る謔言と吐くにや有ん能く我身を省みて正な事をな言ひやと言ふを多九郎阿々と打笑ひ某し之程に申せども知らざと宣まり詮術無しことの趣きを告げ參らせんに驚き給ふかと期を押して小泉半之丞飯高植林に在て執行中我母故有て人より預り居たる大切の娘を咬かし一昨夜飯高を出奔して行衛知す夫より手に手を分て在所を捜索しは彼等兩人この關若に立かくれ居る趣き仔

細有て借のに聞知り某支斯の如く來りしなれば疾やどりの論を待せ速やりに娘を返し給ふ共然無くバ領主の廳に懇へて白洲にて砂利を掘みて取戻し申さんか兩個に壹つの返答なし給へと威丈高も成て置しりければ上人の斯る事有とい夢にも知り給へぬと昨日養道飯高より俄に立歸り來りしに彼去難き川事有ての事成んと未だ訊問もせざりまが借の去筋もて我寺へ來りしよと思ひ給ひなれば驚り騒ぐ多九郎を容め贖し其座を立て養道を一室へ招き多九郎が口上云々と語り給ひて其有無を訊問給ふに養道と先より此事と聞て心中竊りに驚き居たれ共一昨夜俄かに彼所を立出し一旦の色に迷ひてお菊と好通は爲しつれ共深く後悔なしければ此上お菊の請に任せて計俱に走りなば我家の所業も有定去迎件人の趣きを告る共お菊の承諾ざるを知れば假し承諾たる体と示し竊りに用事を拵へて植林を去りいを需めてお菊に約定を違へたるなれば何連多九郎が云る如き事譯成ん然れ共お菊と契り

たるは實なれば餘義無く彼と語らひたる件の事柄を打明
 約束の時を違へて彼を出し扱たる事を陳けるよ上人熟
 々と聞給ひ然の言へ汝其お菊と契りたるが實事成らば此儘
 への打置難し何れへ成とも立忍び行ひを改めて誠の出家
 桑門とも成りしと豫て父親半左衛門より預り居たる金子
 六拾兩を取出し是を養道に與給ひ疾く此寺を退く可しと
 言ひ給ふにぞ養道返す言葉も無く年来の恵みを謝し身の
 罪科と打詫ひ悄悄として養傳寺を立放れければ上人聽て
 多九郎の居たる座敷に來り汝が言葉に就て我自ら養道を
 語問せしに彼に異しき事無にも有ねば只今寺を放逐した
 り恠れば師にも有る弟子にも有ぬ養道の事に就き我寺少
 しも關係無れば汝此品を携へ立歸る可く若し又達て貧道
 を相手に取んと成べ我とお菊等を目前に集へて汝の
 言語の伴りなる事を願はず可しと慈悲忍辱と旨とする上
 人少しく威丈高に言ひければ養道の放逐と聞て評子の扱
 たるにお菊の逃たりと言ふ空事成を身の計較の露顯せ

ん事を恐れ始めの勢ひに似せ彼笹折を持て狐鼠ノくと
 養傳寺を立出たれ共思ふ事の端と成て館堂文の代に
 も成せ空しく足と勞一錢を失ひ恠る詮無き事の有じと壹
 人打咄やきづゝ來懸りたる道の邊の一里塚にて端なく養
 道に出逢けれ共彼養傳寺に在てころ相手にもすれ管笠一
 介の雲水に等しき身と成たれを何の甲斐の有んと是さへ
 も打咄やうれて其儘に走り退んと爲るを養道コヤ〜と
 呼止めて傍に招き汝お菊の爲に我を賣て師の坊より多く
 金を奪へんと爲しに其事合期せず空敷立歸らんこと然こ
 る本意無る可く我も亦汝の爲に寺を逐れて一杖の杖一介
 の笠身に齎らる物無途々落魄たる是も亦過世の約束なる
 に汝が面貌と惡事に匠なるの我先に襖越にて聞知たり
 汝若し我と同意て俱に力を竭さんと成べ我汝の爲に今
 日に優る金儲けの藝を與へんに如何に我意に從ふやと鈴
 かに心を素引けり

○第四回

奸詐出ての極り無き狡兒の多九郎なれば養道が言語未だ
 終らざるに疾くも中への察えて四邊を窺ひつゝ彼が傍に
 差寄り某今回當地に來りたる事専ら和尚の身の上に関
 涉たれば取も直さざれば某は和尚の爲の仇敵あれ共其計る處
 太く趣向を變て竟に目的を失ひ和尚また俄に寺を逐れて
 行處を定め是と云彼と云ひ勞えて功無く寔に詮無き事
 なりと思ふ處に計らざりき和尚某と怨を解て徳に結び
 一個の計較を示して俱に力を竭さんと成ば其爲す處某
 が心に適はば今より仇敵の思ひを翻へし何事ぞ宜ふ旨
 に背くまじと誓を立て陳けるにぞ養道も又一層聲を低め
 思ひしよりの速なる和服が潔き挨拶を聞て悦び何事か是
 に如く可き和服も既に知るゝ如く某原武門に生れ弓馬の
 業を以て名を揚げ家をも起さんと幼穉より心を小て修行
 懈怠無しに計らずも武道の意地に依りて朋友を殺せし
 かば主君の不興を蒙り切腹して相果可き處を上人深く憐
 れみ給ひて衣の袖に我を蔽ひ強て助命を請れしかば某

一命全き事を得て夫より圓頂染衣の体と成り君恩師恩に
 酬はんと日夜學察に眼をさらし正念成佛の工風他事無
 りしに誤まつて和服の家に寄宿したるお菊と契り交膠の
 語らひを爲すものから茲に迷ひの夢覺て我身を省れば佛
 門の徒に有まらざる擧動なりしと後悔齋を嚼も今にして甲
 斐無くせめて俱に走らんと云彼を出し扱て壹人身と清
 めんに如せと不便ながら彼を欺きて竊に遁れ歸りしに
 和服此件りの事を知つて逸早く我寺に來り言葉を設て
 上人に迫りたるより我身忽ちに寺を逐れ喪家の犬の類と
 成りしに始めて世の中の事を思ふに 偶得難き人間界に生
 を亨ながら空しく桑門隱者と云れ人には木の端の如くに
 疎まれ疎く生涯を経營ん事如何計り朽惜き事成ば懸構ひ
 無き身と成たるを幸ひ和服若し我に力を併すと成べ我心
 中の機密を打明諸共に金の藝に懸りて活計觀樂思ひの
 儘に消光こと奈に樂しからせやと説誇けるを多九郎聞
 る敢て笑片まて膝押進め和尚果して斯の如んば和尚と

某假に兄弟の約を定め同じ日に生れざるも誓つて同じ
 日死し緩急俱に援けて骨肉も異ならぬ睦を爲んと言け
 れば开者一段の事也と養道も悦びて互ひの年齢を照會す
 に多九郎は寶曆十一年
 辛巳六月の生れにて今
 年天明二年に廿二歳
 また養道の寶曆十三年
 癸未二月の生れにて
 多九郎といふ二年劣り廿
 歳なる故多九郎を以て
 兄と爲し養道自ら弟と
 稱し竟に兩人近き邊の
 旅宿に上り蓋を上げて
 暫く密談せしが何事を
 企てけん此夜多九郎は
 養道を殘し置き壹人立



出でたりしに子刻の鐘を報するよろ歸り來りてうつく
 と睡も違ひ音信を待居たる養道を見て満面に笑を合まつ
 嬉で懐中より壹個の包を取出して和尚御身の勸誘も任

せ我養傳寺に赴き辛く
 忍び入て奪ひ來りたる
 が足下が物語りたる彼
 一品も紛れなきや氣遣
 しけれバ疾く打披きて
 檢む可一と言ふに養道
 は先づ多九郎が勢を謝
 して靜に燈火を掻立熱
 々を見店たりしが忽ち
 に小膝を礎と打ち我養
 又和殿に告て盗み出さ
 せんと爲しに全く此品



みて是のこれ我宗門の僧侶等殊に尊敬して措ざる處の靈
 像にて往昔我宗祖日蓮聖人佛法弘通の爲に千般難行苦
 行せし際其弟子日朗事故有て牢獄に墮れしの日夜紅涙

に衣の袖と浸し聖人の身の上と案じ煩ひせめては上人の
 像を造りて且暮禮拜し奉らんと牢の土を取て自ら彫刻た
 る我國未曾有の靈像この養傳寺に傳へ來るを知り和殿の

盡力を以て是を掠奪ひ某之を携へて中山の行者と伴り
 普く諸國を巡歴なされ我宗門に歸依爲る老若男女誰か
 豈人仰ぎ尊まざる者有可き恚れ加持祈禱に事を托して
 一時に下利を得ん事定に掌を指が如しこれ併しながら大
 哥の賜物なりと押頂きて傍へ差置ければ多九郎始終を聞
 て大に悦びしが飽すでも奸智に功たる者ゆゑ再び養道に
 對ひて和尙此御像に依て容易金銀を掠めん事案より至極
 の趣向成りも凡る神佛を以て利を射んと思はゞ宜く先づ
 世人の信仰を請るが詮要成バ什麼斯くは如き計較を施し
 手始めの利益を得て夫より心の儘に諸國を打巡らば萬に
 一つ欺りれそと云ふ者有まじと養道の耳より口さし寄せ
 き示しけるにぞ養道禁爾打笑みて此謀略極めてよ、恚れ
 バ速かに思ひ立可しとして翌日諸共に此樓を立出何處と
 も無く出行たり話説分頭爰に江口より上州伊香保の温
 泉場へ行く道筋なる武州柏木村と云處に柏木の長者と稱
 して世々家富に名高き里正傳左衛門と云ふ者けり其家

富たるに委せ男女數十人の奴婢を置き數多の土庫に金
 銀財寶山の如く積貯へ玉を敷て膝と爲し柱と折て薪木と
 爲そ其潜上ある事専ら領主地頭にも超たる當主傳左衛
 門の少壯ころより法華の信者なりければ我佛檀に宗祖
 の直作と言傳ふる日蓮の像を安置し法脈の中に彫刻に
 名を得たる日法の大黒天日親の摩利支天其外法華の守護
 神三拾番神の像を飾り付香を薫き花を供じ日夜禮拜して
 南無妙法蓮華經と唱ふる聲少しも絶る事無し然バ彼宗門
 の法師の高きも低きも皆長者の許へ到り惠を蒙る者且又
 引も切せどかや然るに或る夕邊輪は未だ壯年あり共威有
 て武からぬ一人の沙門長者が門を敲き貧道は法華の行者
 にて諸國の靈場を打廻る者成が依て長者少慈悲善根を修
 して我宗徒を憐れみ給ふ山を開闢望ま堪えと驚がし奉
 り一椀の齋一夜の宿を借參らせたく斯くは尋訪參らせ
 りと言入けるに長者恚る事日毎の事にて更に珍しとも
 思へぬ例の如く粗末無やう計らへよと召仕の者に吩咐

け聽て晚餐も濟たりと聞て彼僧を我居間近き所へ請じ寒
 暖の口直互ひに終りて後ち四方山の話説と成し長者の
 彼僧が齡若く其姿色の艶麗なる女兒と雖及び難き趣き
 有る美質に佛門修行として諸國を遊歴すると聞て且感じ
 目痛めて懇ろに待遇抑々聖僧は何國の御方にて又何れの
 蘭若に在て佛の道に分入り給ひしや苦しからず本國姓
 名を名乗給へりしと言ふに彼僧衣の袖を掻合せて仰せ寔
 に辱々無れど貧道の名も無き匹夫にして佛門に入しも父
 母の菩提を吊る爲のみ整ひ師の名を告げ寺門と名乗りな
 ば師の坊の耻辱とも成ぬ可し此義の偏に免し給へ連再
 回答へされば長者も強ては問を然バ打罵たて休息なし給
 へとて其儘奥へ入しかば彼僧の最前の一室に入て打臥た
 るに其翌日の早且も長者が門を慌しく打敲きて案内を
 請ふ者有しかば老管ら訝しく思ひ其來由を問ふ彼者先
 づ脊の汗を拭ひ息も喘取せ言かやう僕は上總の者にて
 年來品行悪しく父母の勘當を請て此處彼處彷徨者なるが

時の竭たるより不圖善らぬ心を起し晴昔端無く出會た
 る法師に迫りて彼の懐中にしたる路川三拾兩を掠奪ひ飽
 侍と打悦びしに思ひし事空願にて此金を得ると等し
 く身中恰も蒸るゝ如く支骨痛めて堪難きも始は聊か心も
 付せ異しき事に思ひし熱々思へば昨日まで最切かに在
 つる者が俄りに異しき病痾を請しは萬一や掠奪し法師の
 金に事情有る事に有りずやと悟りしを以て試みに件んの
 金を投棄れバ忽ち病痾は忘るゝ如く又取上れば以前に堪
 し苦惱愈々堪難く茲に日來の行ひを顧みれば我身ながら
 も耻かしき良らぬ業に耽りしを菩薩の方便に依て神僧に
 値遇成しめ僕を懲し給ふに社と二十餘年の非を悟り斯
 く必付上の晴昔の法師に追付て此金返し奉らんと病か
 に其行術を搜索しに知る者有て告るよ云々の僧の夕
 へ柏木長者の許に一宿を請れたるを見たれば開の御身が
 索る法師成可しと言に漸く力を得て故意尋ね參らせたる
 に何卒御身の慈悲を以て權化の再來なる神僧に紹介し給

はらば生々世々の高恩ならん嗚呼苦しや堪難やと身悶して撲地と打倒れしにぞ老管ら是を聞て太く打驚き皆諸共よ長者の前へ出て件んの事を語り這者如何言らひ申さんと口を揃へて懇めるよ々長者眉に皺寄つゝ稍あり言ふやう是必老夕へ我家へ來りたる若僧の上に當れり我始めて對面せしが言語應答尋常の法師成老と思をもて屢問試みたれ共固く辭て告されは我も強て詰問ざりしが諸之光りを埋め徳を隠そ名僧智識にてや在しけん這者漫なり勿体無し迎家内俄に打散動主個傳左衛門は清淨なる新しき衣服を纏ひ彼僧が只今起出たる一室に到り遙かに飛退りて恭しく目禮に及びしかば彼僧驚きたる面色にて這者何事の有て斯く貧僧を敬ひ給ふにや一宿の報施さへ最る可き貧道ころお禮とも厚く申す可にて候もれをと急に起て傳左衛門を引起さんと爲るに主個先々と押止め彼僧を上座に居しめ再回額付て畏るゝ言やう某眼有な

のら眞の菩薩を知せ夕邊よりの無禮何を以て打罷奉らん道や有可き然るよ只今壹人の男來つて聖の高徳を稱へ奉るを聞て我も又始めて菩薩の來迎を知り隨喜の涙止り難く生涯の大慶是に過る物有んと彼聖人が奪ひたる金と返さんと殊更に跡を慕ひ來りたる事を物語りければ彼僧微笑て寔は佛法の廣大なる末世の今日と雖斯の如し今何をか隠し申す可き貧道は中山の行者にて名を日道と稱し日本六拾餘州に杖を曳て我宗門に廣宣流布せん爲め名を隠し姿を衰し諸國を徘徊なると善を勤め惡を懲し王法佛法に背く無智の頑民を濟度せん爲成に晴昔云々處にて壹人の曲者貧道が懐中せし路用を得んと云にぞ我少しも恐れれを請がまに／＼取せしか共懲る者を此儘打置なを良民の害と成且と彼自が罪業を作りて永劫地獄に墮ん事を哀しむ我處に壹つの法を施し彼を懲したるのみ彼今幸ひに身の罪を知り佛法の廣大なる事を知後悔せしと成バ法を解て彼を助け得させんに疾く此處へ招き給ふ

可しと言に主個益々畏こみて彼曲者を伴ひければ兇漢彼僧を見て涙を流し昨日奪ひたる金残り無く取出何卒我罪を免して一命を救ひ給へと手を併せて掻口説ければ彼僧の靜に宗旨の工徳莫太なる事と説て懇ろに誠め汝一回命に懸て奪ひたる金を我に返さんと思ふが則ち良心に立戻たる成は菩薩も汝が罪を許して改めて此金汝に賜るなれば是を資本として正しき業を後一期を安かに消光可しと叮嚀反復説諭し彼金を與へければ曲者感涙を拭取定押頂きて懷中に緋め彼法師と主個に眼を告て悦び勇んで立歸りければ主個の法師が座に交へぬ清潔なる心に信心膽に錦と尊敬始めに彌堪りしが此僧昔く近郷近在に響き幼き背に負れ老たる杖に纏り活菩薩を禮拜せんと歩を運ぶ者引も斷定依て日道の人々の勸めに任せ加持祈禱を修するに法顯著しく顯りしかば皆隨意渴仰の涙よ咽ひて信仰日々に厚かりけり

○第五回

借も中山の行者日道の主個傳左衛門の進めに任せ諸人の請に應じて加持祈禱を爲ると不測や奔なる病者と斷絶て癒ざる者無れば信徒日増に多く活菩薩と稱せし程に僅か十日に足せして數百金の御分付たるが日道主個に對ひ貧道の囊に陳しつる如く善く國內を遍歴なし我宗門の廣大無量なるを流布爲しめん所存なれば足下の厚志は棄難けれど翌日は一ト先此地を去り一ナ筋へ赴く可疾心底を決したりと言に主個の傳左衛門の頻に餘波を拵惜ま干般に引止められを固く承諾ねば是非無く懇ろに別れの袞裳を開き聖僧既御心を定め給ひしと有止め奉らん様は無く此儘別れ奉らん某父祖三代三法に歸依し偶々聖僧の如き活菩薩に值遇し奉りながら逗留儘かにして疾くも別れ奉らん事頗る遺憾成ばせめては道の費とも補ひ奉り度這者聊の物ながら御受給め下さる可しと豫て用意を爲たと思しき金五十兩を紙に包み恭しく取出しけるにぞ日道の淺からぬ志しを懇ろに

謝し數回辭て聽て候中に紙の「貧道猶」方中國を經歷し再
 回關東に松を曳バ必き又來りて今日の厚意に酬ひ申さん
 と言て打臥けるが疾くも翌日に成ければ主個を始め家内
 一同へ辭別の挨拶をな
 し飄然として立出るを
 皆諸俱に送り出て茲に
 袂を分ちたり恁て日道
 の拾丁餘りも來りける
 處に忽ち傍らの辻堂の
 裡より顯れ出たる壹
 人の男前後を見廻し日
 道の側へ依り奈に和尚
 我計る處に違はせして
 莫大の金を得られたり
 と言ふに日道も又四邊
 を窺ひの、貧道大哥の



妙計に依て中山の行者、偽り加持祈禱を施せしに謀る處
 少しも違ひを多くの信者と欺き貳百兩を得たれば是を手
 始めとして普く國內と遍歴爲り万金を掠め取んこと何の

疑ひか有可き併し御身
 盜賊の体を爲し奪ひし
 金を某の目前へ排列
 涙を流して打詫られる
 光景奈にも眞に迫りて
 甚だ感心せりと言ふ彼
 男呵々と打笑ひ某が
 勞少きに有ねと和尚
 座に坐りて殊勝なる聲
 と發し某を教誡せし
 手際の誰の偽物と心付
 く可き天晴名僧智識ど
 見にて日來にの見増り



たりと是さへに懇て等しく動と打笑ひたる是此兩人の何
 者ぞ則ち前回に畧述せし小泉半之丞の養道と花賣お婆
 お丑の倅多九郎にて關宿を出る刻み養傳寺の什寶日期作

の靈像を奪ひ取り養道の日道と偽稱し多九郎の破落戸と
 成り途にて養道の金を強奪せまに佛罰を請て忽ち悔悟し
 養道の日道へ金を返し法力と示して村郎野孃を欺き不義

の金銀と騙取たるまで有らば、二人暫く談合て居たりしが、多九郎養道に打對ひ和尙某が計略にて今大金を得たれば、宜しく二個に分て我得分を授け給へと言けるに、養道點頭て懐中より貳百兩の金を出し、既に分ち與へんと爲しが、忽然と思ふや、此多九郎素より放蕩無頼の曲漢なれば、到る處奈なる事と爲出し、災ひを惹起さん計り難く、依て不便なれ共、彼を亡なす時、我爲め後日後ろ易く思ふ儘の世の中を經らる可しと、茲にまず一惡逆無道の計較を思ひ立去氣無き体にて、待遇て、窺かに多九郎が光景を窺ふに、何の心も付ざる容子なれ、仕濟したりと思ひ、然るに二百兩の中を分ち大哥の勢に酬はんと、金差出を多九郎が笑片傾取んと爲る、油斷を狙つて、丁と突く養道の翠に、機れむ可し、多九郎後ろへ動と倒る、機會に幾千、奴共見分らぬ、深き谷間へ落入たるを、透し眺めて、荒爾と打笑み、勘爲し置、氣遣ひ無しと身繕ひして立んと爲し、少養道俄かに、蹴蹴なま我誤つて、手振りせりと、只管遺憾れ、面色して、谷を見

詰て居る折柄、幾十人とも見分らぬ、多くの人、僻近付く故見咎められて、と妨かと思ひ、直して立去りけり、詭説復舊案下某生、爰に下野國鳥山と言る處に、諱名を天海と稱する、稀有、た惡僧有き、彼往昔の、上總の飯高、楳林に在て、勤行怠り無く、一の側に連る身分成しに、色を好み、酒を嗜みて、品行宜しからざれ、の竟に、彼處と透れ、夫より所々方々を、彷徨うち不良徒と交際り、果は強盜の首領と成り、無住の古寺を、棲息として、惡逆日々に加りしが、或時天海、四五個の乾兒を、率ひ下總に、關宿に到りしとき、水懸峠に於て、艶麗なる婦人を、伴お旅の武士を見、懸しかば、數多し、雲介を語ひ、喧嘩と、賣て挑と争ふうち、彼娘を奪へんと計りしに、彼武士、意外に手強き故、天海携たる鐵砲を、以て矢庭に、打殺し、僥倖と、悦びて、辛くも、彼娘を古寺へ、運歸り、夫より、手段を設けて、從ひせんとすれ共、女一圓に、聞入す強て、迫る時は、舌を嚙切り、自ら死せんと爲る景狀を示せしかば、了得て、天海も、術計竭果て、如何せん、と案じ、煩ふに、此女は、是別人成、高瀬五太夫が、嬢に